

時のひと

土産物の設計や金型、部品成型、梱包のすべてを地元企業が担う「製造業」が当地お土産プロジェクトの旗振り役を務める。新興国の台頭で中小の製造業者が疲弊する現状に「勝てないとあきらめるのでなく、知恵を出し合って技術革新を追求するべきだ」と熱く語る。

(聞き手・小佐野慧太)

「製造業」が当地お土産プロジェクトとは。

「観光地に並ぶ土産物の製造元表示に、新興国の名前があることを疑問に思ってきた。各地の製造業者の連携で、技術を生かした土産物を作ってもらおうと始めた企画だ。競争を生む土俵づくりと捉えており、日本の製造業を活性化させる狙いがある。観光に生かせるなら、行政や商工会とも連携していきたい」

設計会社社長 ◆ 橋爪 良博さん(37歳)＝伊那市



「町工場にはまだまだ可能性がある」と話す橋爪さん＝伊那市で

土産「完全地産全国」

伊那市内の業者の第一弾となる「サクラコマ」はどんな製品。

「ステンドレスのこまにプラスチックの花びら五枚が付き、遠心力で開く仕組みになっている。金型や梱包など、市内の製造業者七社が、会社を継いだ二〇一〇二人から十人以上に増えている」

「祖父の代から続く家業で、モーター部品などの製造を手掛けてきた。最盛期には従業員六十人を抱えたが、会社を継いだ二〇一〇二人から十人以上に増えている」

「再生を果たすことができた。医療、家電メーカーなど新たな取引先との縁が続々と生まれ、従業員も当初の」

「再生を果たすことができた。医療、家電メーカーなど新たな取引先との縁が続々と生まれ、従業員も当初の」

「再生を果たすことができた。医療、家電メーカーなど新たな取引先との縁が続々と生まれ、従業員も当初の」

那市から全国に広がっていきたい。市内では第二弾として、市のマスコットキャラクター「イーナちゃん」のプラモデルを今夏に発売する予定だ」

「各地の製造業者に伝えたいことは。『日本全国にはすごい技術を持った業者がたくさんある。各地で土産物づくりを通じた競争が始まれば、蓄積されるノウハウが技術革新につながると信じている』

はしづめ・よしひろ 1975年、伊那市富県生まれ。東京製図専門学校(東京都)を卒業後、複数のメーカーで設計、製造を経験。2010年から「スワニ

」社長を務める。下請け製造業者から三次元プリンタを使う設計会社に転換し、事業を拡大。今春には市内6社と連携して「サクラコマ」を発売した。